「言」と「象」の狭間：「説文解字叙」を手がかりに

中谷　一（マギル大学）

中国最古の字書『説文解字』の末尾を飾る「叙」は、漢字の構造と歴史に関する体系的な考察としては最も早いもののうちに入るであろう。しかしそこで展開される文字起源論は、近代的な文字了解からすると相当に異様なものだ。

許慎は文字の起源と歴史を、聖人による易の八卦の発明に始まって「結縄」を用いた行政記録へと連なる系譜の延長線上に位置づける。この文字の系譜学は、神話の衣をまとった一種の「記録メディアの考古学」としてしばしば引用される。しかしその一方で、その中で作者が、文字とことばの間に我々が通常想定するような対応関係を実にあっさりと素通りしてしまっている、という驚くべき事実については、ほとんど言及されることがない。「叙」の系譜にあっては、漢字を言語（正確には「言」）との関係で生成変化するものととらえる視点はきれいに消去されているのだ。

「言」から切り離された文字は、今度は易を起点とする図象的システムの歴史＝神話的な展開の一環として捉え直される。もちろん、時としてそれらの諸システムが（結縄のように）何らかの記録機能を発揮しうる、という事実が否定されるわけではない。文字にしても、「言」を書き記すことができるのは自明のことであり、許慎自身文字をそのように使用して「叙」を書き記している。しかしより根源的には、易をはじめとする諸システムは、世界自体の図象的な秩序の延長線上にある何かであり、その世界秩序を直接写し取るようなものとしてイメージされている。鳥獣の足跡を眺めて書契を創始した倉頡は、天地の形象を観じて易の八卦にすくい取った庖犧（伏犧）の宇宙論的振舞をなぞり反復する。そして、『説文解字』の全体が実は、文字を易に類した体系性を帯びたもの、「文の秩序」とでも呼ぶべきシステムを内包するものとして提示する試みだったのだ。

漢字はこうして一旦「言」から切断され、「象」や「図」の側へと引き寄せられる。しかし同時に、易の図象的体系性に依拠して漢字を秩序づけるという『説文解字』の構想は、図象諸システム間に一種の序列関係を持ち込まざるを得ない。つまり、文字や易といった図象的なものは、「文の秩序」の中で横並びになっているのではなく、そこには、文字は範例性に於いて易に一歩も二歩も譲る、いわば二次的なものだ、という暗黙の前提が垣間見えるのだ。このような序列感覚は、上述した伏犧と倉頡との反復関係にも反映している。易が文字に先行し、文字を可能にするものとして位置づけられている、というばかりではない。そもそも、三皇五帝の筆頭を飾る始原の聖人伏犧と、黄帝の一介の史官にすぎない倉頡の間には、乗り越えがたい溝が横たわっている。天地の森羅万象を眺め尽くす伏犧のまなざしの雄大さに比べると、禽獣の足跡にばかり目を奪

われる倉頡の視界はあまりにも狭く、卑近だ。だから、神話的振舞の反復とはいっても、倉頡のそれはあくまでも矮小化された反復でしかないのだ。

無論、中国最古の字書を編纂した許慎の意図が文字を貶めることにあったとは考えにくいだろう。事実、『説文解字』が漢字を壮大な宇宙論的ヴィジョンにからめ取ることに成功したことは、その後世への影響力が如実に物語っている。しかし、そのヴィジョンの中心に据えられた漢字の姿は、どこか危うい。「事」を書き記し「言」に寄りそうその性質のゆえに、文字はややもすれば図象としてのコンパクトな根源性を喪失し、煩雑な世界の表層に同化してしまいがちなのだ。

文の秩序の中枢にありながら、文の秩序を逸脱する可能性もはらむ漢字という形象の危うさ。「漢字の磁場」とはそういう緊張関係を言うのであろう。この緊張した磁場への自覚は、漢代にあってはまだはっきりとした輪郭を獲得することはなかった。しかし、いわゆる漢字文化圏（「漢字トラウマ圏」！）の成立と展開の歴史は、この磁場の矛盾に満ちた力動に飲み込まれ、翻弄される歴史であったはずだ。その力動をすくい取る批評言語を模索したい。

説文解字叙（抄）

（『中国書論体系』第一巻より）

敍曰[1]、古者[2]庖犧氏[3]之王天下也、仰則觀象[4]於天、俯則觀法於地、視鳥獸之文[5]與地之宜、近取諸身[6]、遠取諸物、於是始作易八卦[7]、以垂憲象[8]。及神農氏[9]結繩[10]爲治、而統其事、庶業其繁[11]、飾僞[12]萌生[13]。黄帝之史倉頡[14]、見鳥獸蹏迒[15]之迹、知分理[16]之可相別異也、初造書契[17]。百工以乂[18]、萬品以察[19]。

叙にいう、その昔、庖犧氏が天下を支配していたが、空を仰いで天文を見、地に俯して法則を見、鳥や獣のもようと土地の適否とをよく視て、近いものは自身で感得し、遠いものは自然現象で察した。そこで始めて易の八卦を作り、法則をもつ象（シンボル）を垂示した。神農氏が縄を結んで世を治め、庶事を統（す）べようとするに及んで、多くの仕事が極めて繁雑となり、飾り偽（いつわ）ることがきそって生じた。黄帝の史官倉頡は、鳥や獣の足跡を見、そのもようで物それぞれを区別できると知り、初めて書契を造った。百官はそこで治まり、万物はよく見分けられた。